

【子育て四訓】

- 一、乳児は しっかり 肌を離すな
- 一、幼児は 肌を離せ 手を離すな
- 一、少年は 手を離せ 目を離すな
- 一、青年は 目を離せ 心を離すな

これは、山口県下関市で長く教育に携わった緒方甫氏の「子育て四訓」です。有名なことばなので、どこかで見聞きした方も多いことでしょう。子どもの発達段階に応じて、親と子どもの距離を離していくこと

と。そんな親としてのスタンスを分かりやすい言葉で教えてくれています。

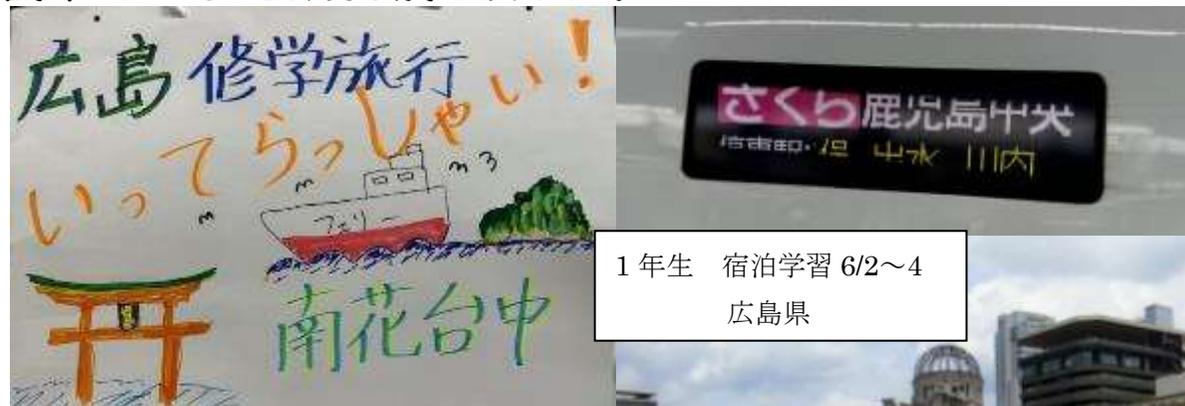
厚生労働省のいくつかの調査では、「幼年」は0～4歳、「少年」は5～14歳、「青年」は15～24歳という区切りにすることが多いようなので、これを当てはめてみると、小学校入学が手を離していく時期の目安、中学校卒業が目を離し始める目安だと言えます。

でも、いきなり手を離されたら子どもは不安になりますし、同様に、急に目を離されても困惑するでしょう。小中学校に在籍している9年間で、親が徐々に手を放し、目を離す準備をしていけば、子どもはスムーズに自立に向かいます。と、言うのは簡単。どんな場面で、どうすることが正しいのかが、たいへん難しいところです。

学校では、小1は連絡帳に宿題の内容や翌日の持ち物に加えて保護者に見せるプリントが〇枚ということまで書きます。それを保護者に確認してもらいます。中3では当然ながらそこまでしません。小1と中3なら、差が大きいのでわかりやすいのですが、では小3と小4では、小6と中1では、となると微妙です。学校では児童生徒の個人差もありますから、個別の対応は必要ですが、全体としては学年ごとになだらかに自立を促していけるようにしていかなければならないと思っています。小中が別々にある他校よりなだらかにできるのがこの施設一体型小中一貫教育推進校の仕組みだと思しますので、緊密に連携していきたいと思っています。

娘が幼いころ、私が修学旅行の引率等で家を空けると、てきめん発熱しました。我が家ではそれを「ママ切れのお熱」と呼んでいましたが、すっかり大きくなった今では、修学旅行で留守にしても熱を出すどころか「いなかったこと知ってる？」と聞きたくなるような態度です(少々ボヤキになっています)。娘の方も、親の私から手と目を離れたようで、寂しさと頼もしさを味わっているところです(寂しさ多め)。学校でもそれぞれのご家庭でも、徐々に子どもたちが自立に向かうことを意識して、寂しさや物足りなさをぐっとこらえながら、子どもたちの自立を支えていきましょう。

各学年メインともいえる大きな行事がありました。



1年生 宿泊学習 6/2~4
広島県



1年生 宿泊学習 6/9~10
貝塚市：少年自然の家



2年生 職場体験 6/11~12